

悠久の京を訪ねて Part IV

Vol.10



KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER

京は古より人々が集い、その気候・風土の中、人々の生活が営まれてきました。

京都府内の遺跡で多数発掘された出土品により、縄文・弥生時代までさかのぼり、当時の様子を知ることができます。

私たちが住んでいる地域にはどのような歴史があったのか、出土した資料を基に過去の文化やその発祥の歴史を訪ねましょう。

瓦を焼く：国史跡奈良山瓦窯跡

■瓦屋根のはじまり

仏教が伝来してから数十年経った西暦588年、我が国初の本格的伽藍配置をもつ寺院である飛鳥寺の造営が朝鮮半島から「瓦博士」らを迎えるはじまりました。日本初の瓦葺きの建物が、飛鳥の地に出現したのです。

飛鳥時代末の西暦694年、藤原京が建設されます。藤原京では、宮の主要建物や築地塀に瓦が用いられました。和銅3(710)年、平城京に都が移されます。平城京では、宮の主要建物だけでなく、京内の貴族の邸宅にも瓦が用いられ、一説によると藤原京では150万枚、平城京ではその4倍の600万枚もの瓦が使われたとされています。

このように、当初、寺院に用いられた瓦は、時代が降るとともに、都の役所や貴族の邸宅、日本各地の寺院や役所に採用されるようになります。

■平城京の瓦工房

平城京の北、京都府と奈良県の境に位置する奈良山丘陵では40箇所以上の瓦を生産した窯跡が見つかっています。これらの窯跡を総



梅谷瓦窯出土の軒丸瓦・軒平瓦
(興福寺創建瓦)

奈良山瓦窯跡



称して、奈良山瓦窯群と呼んでいます。

各窯跡で出土する瓦と、寺院や宮などで出土する瓦の文様や、製作技法を比べることで、どの窯の瓦がどこに供給されたのかを明らかにすることができます。これらの研究の結果、梅谷瓦窯跡は藤原氏の氏寺である興福寺に、音如ヶ谷瓦窯跡は法華寺に、歌姫・市坂・鹿背山の各瓦窯跡は平城宮内の建物に瓦を供給していたことが分かりました。

奈良山瓦窯群は、その供給先が明確であり、平城京内の役所や貴族の邸宅および寺院の瓦を焼くために計画的・組織的に造営された官営工房群であると判断されます。

このように、当時の瓦生産の実態を示す貴重な遺跡であることから、奈良山瓦窯跡は平成22年、国史跡に指定されました。指定されたのは上記の5つの窯跡で、このうち、大規模な瓦工房が伴う市坂瓦窯跡は遺跡公園(上人ヶ平遺跡公園)として整備されています。



梅谷瓦窯跡で見つかった瓦窯